百目と定められてゐた。

(六)大聖寺藩—大聖寺藩領では、江沼郡篠原の垣内篠原新、新保の垣内伊切、能美郡佐美の垣内濱佐美三ヶ所のみに鹽竈があつた。しかし、茇憩紀聞には、昔小塩村に塩竈があつたとも記される。

シホ　子浦（シオ）　羽咋郡邑知院内志雄庄に屬する部落。能登名跡志に、『此所は昔より驛にて、初は志保と書き、則志保神社立ち給ふ。』と見える。こゝに志保とあるのは子浦と共に後世轉じたものであり、元來萬葉集大伴家持の歌に見える如く志乎とするのが正しかつたのである。子浦の文字に就いては、延寶五年の繪圖方留記に、『正保三年高辻帳に羽咋郡志雄村と書上る處、村御印書替の町村方より申立に付子浦村と書直る。寛文四年高辻帳には正保の如く書上る。』とある。村御印書替の時とは寛文十年のことであらう。

シホ　之甫　→ソウガハヤシホ　相河屋之甫。

ジホ　地保（ジホウ）　羽咋郡秤造庄に屬する部落。

シボウ　四坊　河北郡五ヶ庄に屬する部落。

シホウシンカイ　仕法新開　→シンカイ新開。

シホウダカ　仕法高　藩政の時、債務者がその債務を辨濟し得ざれば、所有の高を債權者に渡し置くも、借用の元銀に對し契約の利足を仕拂ふときは、高作配を爲し得るものを仕法高といふた。

シボウタカサカ　四坊高坂　河北郡五ヶ庄に屬する部落。

シホウチヨウダツギン　仕法調達銀　文政元年加賀藩は財政の窮乏を救はん爲、八月十日組外御番頭木梨左兵衛有慶、定番御馬廻番頭竹田彦六郎忠直を御仕法御調達方御用に命じ、十月富豪に對し初めて仕法調達銀の提供を命じた。蓋し從來用銀の上納を命ずること數十回に及んで、もはや之に應ずるものがなくなつたから、新たなる名稱を擇んだもので、實は取除賴母子に外ならず、藩は吏を派して强制的に之に加入せしめた。仕法調達銀の方法は、銀一貫目を一口、六十口を一組とし、七月・十二月の抽籤によつて、第十會まで毎回二人、第十一會は殘餘全部を償還することゝし、一人にて一口を加入し得ぬ者は數人で負擔せしめた。故に文政元年成立の組は六年に全部償還せられ、二年に成立の組は七年に滿了する筈であつたが、同三年財政困難を理由として、改めて償還期限を五ヶ年延長し、遂に齊泰の時に及び、文政九年その契約を破毀して將來償還を行はざることゝし、同時に藩より仕法調達銀を借用せる士人の債務をも解除することにした。これこの年藩は領民に對し、多額の用銀上納を命じたから、若し仕法調達銀をも出さしめる時は、二重の上納を要することゝなるが故に、之を救濟せんとするものであるとの口實であつたが、それは理由にならぬ理由に過ぎなかつた。

シホガハ　子浦川（シオ）—　能登に於ける長流の一で、源を寶達山の東方に發し、羽咋郡所司原に至つて西北に轉じ、深谷に發する深谷川を容れ、子浦に至つて北流し、石野町で再び西に折れて羽咋町に入り、こゝに敷波より發する長者川を併せ、遂に羽咋川の下流に合してゐる。その流程二〇粁。

シホカハチヨウ　塩川町　金澤の町名。藩士塩川氏が數代居住した故の稱である。

シホカハヤスザエモン　鹽川安左衞門　初名孫作。慶長十九年初めて前田利常に仕へて七百石を受け、大坂再役に使番を勤め、後利常の小松に退隱した時之に從ひ、次いで金澤に歸つて塩川町に住した。二代安左衞門、萬治三年家を襲ぎ、小松町奉行となり、寛文三年歿。三代安左衞門久貞は、初名平八、俸六百石、組頭並今石動等支配に至り、享保九年致仕して休庵と號し、十八年五月八十八歳を以て歿。久貞の養子孫作久之は是より先寶永九年に歿し、その子安左衞門久元祖父の後を受け、明和二年十月七十歳を以て歿した。故に諸書に傳へる享保十八年伎藝の者を自宅に招き興行せしめて問題を起した安左衞門は久元である。

シホガマザクラ　鹽竈櫻　金澤兼六園千歳臺の中央に在る。根元の周圍六米四、地上九〇糎で五幹に分かれ、その分岐點で周圍五米八。薄樺芽で白色八重約十瓣。花徑四糎五。

シホカラ　鹽辛　鳳至郡西海岸の製を名產とした。能登名跡志に、『鹿磯村より輪島まで、西海七浦の郷とて村々多し。西海鯖とて刺鯖・塩辛類の名物也。深見・大澤・五十洲・皆月・鵜入・光浦・下山などゝて、御進物塩辛等は、此浦傳ひの灘より上るなり。』と見える。塩辛に二種ある。脊腸は生鯖の肝臓及び幽門垂を撰分けたもの一升に塩三合の割合で漬け、六十日乃至百日を經た後に之を上げ、天秤仕掛で升を搾り、庖丁で打碎いたもの。他を切込といひ、脊腸を漬けた液に鯖の切身又は鯖子等を浸したものである。しかし脊腸の製造は今日行はれず、その代りにナシモンというて、鰓・食道及び腸を除いた以外の内臓全部を塩漬にしたものがある。因にいふ、前記幽門垂は幽門盲嚢ともいひ、胃及び腸の境に存する一種の附屬腺で、灰色の房狀をなす。魚類により全く缺如し、或は二三個なるもあるが、鯖では百個に及び、能登ではそれをスジノフサというてゐる。

シホカラドゾウ　鹽辛土藏　金澤城本丸に在つて、干糒・鹽辛等軍用の糧食を藏したものであつた。建築の年暦は明らかでないが、明治廢藩の後までも存し、その鹽辛は鮎の大きなものであつたといふ。

シホコシノマツ　汐越の松　廻國雜記加賀の本折の次に『汐こしの松を見侍りて、年波の外にもたかき汐こしの松の昔ぞ汲みてしらるゝ』とあるのは、果して何れの地であらうか。蓋し汐越の松は加賀と越前の境なる、北潟の水が海に朝する所の左岸越前の濱坂村に在つたとするは普通の說で、芭蕉が奥の細道にも、越前境吉崎の入江を舟に棹して汐こしの松を尋ねたことを記し、且つ西行の詠であるとて、『夜もすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐こしの松』の歌を引用してゐる。奥細道菅菰抄には、この歌の作者を西行ではなく蓮如であるとしてゐるが、吉崎の入江は卽ち北潟で、その下流に汐越の松があつたとするに於いては同一である。しかし廻國雜記に謂ふ所の汐越の松が濱坂附近でないことは、本折と佛ノ原との中間に之を叙してあるによつて知られ、隨うて其の所在を小松より遠からざる地に求めねばならぬ。思ふにこゝに根上村があるが、邑名は根上りの松があつ